

子どもの遊びが高齢者心理に及ぼす影響についての研究

—— 高齢者臨床における遊びを通した子どもとの交流の調査研究 ——

内 本 隆 宏

1. 問題と目的

戦後における安定をめざした社会制度の普及や高度な医療は高齢化を加速させ、先例のない速さで日本は超高齢社会となった。日本人の老年期が延長された現代にあって、高齢者は長くなった老年期をどのように生きるのかという課題を抱えることとなり、そのライフスタイルは大きく変わろうとしている。さらに、高度経済成長による飛躍的な近代化は日本の社会構造を複雑に変化させ、かかる都市化や過疎化により家族生活の形態は変化を余儀なくされた。特に核家族化による単独世帯の普及は、祖父母である高齢者と孫である子どもとの世代間の遊離をまねき、生活の多くの領域ですれ違いを生んでいる。高齢者世代と子ども世代が共に暮らすことで成立していた育て支え合う営みが、家庭環境から削り取られる傾向にある。

社会構造の仕組みそのものが比較的単純で変化も少なかった時代の社会システムにおいては、豊富な経験をもつ高齢者は尊敬され大切にされる存在であり、生活の伝承者としての役割があった。さらに、日常生活では高齢者世代と子ども世代には強固な共生関係が保たれ、働きに出る親世代に代わって子ども世代への教育は祖父母である高齢者世代が担っていた。しかし核家族化が進行する現代においては、高齢者がその伝承者としての役割を果たす機会は少なくなってきた。そのため子育て経験の豊富な高齢者の知識が次世代に伝わりにくくなり、家庭内の教育力や介護力を低下させることが危惧されている。この状況が続くことになると高齢者は限定された生活のなかで社会的弱者として位置づけられる傾向がさらに強まると考えられる。生きがいの喪失、不安を抱えた閉じこもり、加えて残りの人生に介護が必要となった場合の高齢者自身の精神的負担と将来的不安は計り知れない。現代における高齢者のこころのケアとは、高齢者自身が心豊かに生きがいある生活をおくるためのケアでなければならないと考えられる。

本論は、希薄化が憂慮されている現代の高齢者と子どもとの世代間関係に焦点を絞り、遊びを通した子どもとの交流が高齢者の心理に及ぼす影響を明らかにすることを目的とし、課題先進

国と指摘される超高齢社会の日本において、新たな高齢者のメンタルヘルスケアのあり方を提案するものである。

2. 先行研究の概観

本論の端緒として、高齢者ケアの基礎研究となる高齢者心理の研究の歴史、次に高齢者の身体機能と感覚機能の加齢変化に注目し、高齢者心理学における研究を概観する。さらに高齢者と子どもの世代関係の変遷とその周辺研究についても概観する。

2-1. 高齢者心理の研究の流れ

2-1-1. 高齢者心理学の歴史

「老い」に対するこころの問題は古来より探究されている。古代ローマ時代の政治家で弁論家であった Cicero, M.T. の著書である対話篇『老年について』(B.C. 44) のなかに次のような場面が出てくる。84歳の大カトーがスキーピオーとラエリウスという2人の若者に対し、「老年を守るに最もふさわしい武器は、諸々の徳を身につけ実践することだ。生涯にわたって徳が涵養されたなら、長く深く生きた暁に、驚くべき果実をもたらしてくれる。徳は、その人の末期においてさえ、その人を捨てて去ることはないばかりか、人生を善く生きたという意識と、多くのことを徳をもって行いたいという思い出ほど喜ばしいことはないのだから」と語る。ここには賢明な人生を送るための精神や理性、思慮は老人の中にあるという「老い」の充実性が著されている。

佐藤 (2014) によれば、「老い」にかかる最も古い記述としては、紀元前2600年頃におけるメソポタミアの『ギルガメッシュ叙事詩』に残されており、また日本においては、『日本書紀』や『古事記』などに「老い」や「死」の心理にかかる記述が残されている。しかしながら心理学の領域における老年期の研究の歴史は浅く、20世紀初頭まで代表的な心理学は老年期には注目していなかった。この理由については、成人期における変化が初期発達に要因があるとの見解 (佐藤、2008) から、成人期以降に発達研究の必要性を認めなかった流れがあったものと考えられる。これに対して Jung, C. G. (1969) は生涯発達観を提示し、成人期までに限ることなく、人生の後半における発達にも注目した。老年期は喪失が迫ってくる時期ではあるが、人生後半の内面化の過程を衰退としてではなく成長として捉え、この時期の発達はそれまで抑圧してきた内なる自然の自己の真の姿の発見にあるとした。

また Havighurst, R. J. (1972) は発達課題 (developmental tasks) の考え方を提起した。発達課題とは、個人の生涯のいろいろな時期に生じるもので、個人の成熟と課題解決への個人的欲求 (意欲) と社会の要請 (強制力) がなければ課題解決は困難であるとしている。

Erikson, E. H. (1959) は、自我理論から人間の生涯を検討して心理社会的発達を主張し、ライフサイクル論を提唱した。ライフサイクル論では、人間の生涯を 8 つの段階に区別し、各段階には解決すべき発達課題と心理社会的危機があるとした。老年期は 8 つ目の段階に当たり、この段階の発達課題は統合性である。Erikson, E. H., et al. (1986) は統合性について、これまでの自分の人生を自らの責任として受け止め、人生の意味づけと残された問題を処理すること、つまり近づく死に対して安定した態度を持つことが求められると述べている。換言すれば、自分の人生に不完全感がなくなる限り絶望に陥るとしているのである。

Jung, C. G. や Havighurst, R. J., Erikson, E. H. 以外にも、Peck, R. C., Levinson, D. J., Baltes, P. B. らによる生涯発達論や成人発達論の理論化の貢献により、老年期の研究は生涯発達の視点からの研究に刺激されるようになり (谷口, 2007)、1960年代以降、高齢者心理学はより多彩な視点をもって研究されるようになったと考えられる。

1959年に Birren, J. E. は、初の高齢者心理学の教科書となる『Handbook of Aging and Individual』を刊行した。同書は1977年に Birren, J. E. が編集代表となり、生物学、心理学、社会学の分野が独立して 3 編に編集され、これが初期の高齢者心理学の集大成となった。これにより老年期の心理学研究が発達心理学と連続している分野として確立された。さらに改定が重ねられた『Handbook of the PSYCHOLOGY of Aging』(Birren, J. E. & Schaie, K. W., 2006) は、自己概念の加齢変化、人格の生涯発達モデル、コーピングと心理的適応など、内容が次第に細分化されていく中で、ライフコースにわたる人格の変化や安定性が追究されている。

高齢者心理学が有する科学としての認識対象は老化または加齢であり、認識方法は心理科学の方法、すなわち実験、観察、調査などによるデータの分析と収集である。認識対象である老化や加齢は、老いの過程を問題にしており、有機体を時間的な関数で扱う発達心理学と共通する。さらに老化や加齢による変化を調べるためには、老年期以前の過程との比較研究が必要であった (佐藤, 2008)。これらの研究の流れがのちの生涯発達心理学を生起させる要因になったと考えられる。

近年において高齢者心理学は、中高年期のパーソナリティ研究の進展にともない、サクセスフル・エイジング (successfulaging) の研究が、高齢者の社会的地位や役割の問題、エイジズム (年齢差別) や年齢規範の問題を課題として社会科学的な研究と関連づけて行われるようになった。

2-1-2. 老年学 (Gerontology) について

老年学 (Gerontology) は、人間の老化や老年期への理解を深めるため、医学、生物学、社会科学、心理学などのさまざまな学問分野からアプローチされ、全体的に広角な視野で学際的研

究に臨む位置づけから構築された学問である（谷口、2007）。老年学における加齢プロセスの捉え方について橘（1971）は、「加齢は単に人間の問題にとどまらず、生物一般の問題である以上、当然重大な関心を持つべき事実である」と述べた。さらに橘（1971）は、「この老年学の近代的提唱は、aging の発見によって老化の本質を究明するとともに、実践的な側面において、老人に逼迫する現実の生活実態や、それに対する緊急な世論にこたえようとしたものであったにちがいない」と指摘している。加齢や老化には、衰えあるいは弱体化するというイメージが強いが、人生を経年的な視点でみると、そこには人間が通過する世代ごとに適応しようと変化してきた生活体があることに気づく。老年学とは加齢を単に歳を重ねるという事実ととらえるのではなく、生活適応が生涯を通して加齢とともにどのように変化していくのかを研究する学問である。

また、“aging”という言葉の出拠について、橘（1971）は、「aging という言葉は、1937年にアメリカにおいて、‘Clubfor Research of Aging’ が結成されたときにはじめてあらわれたのではないかとおもう」と述べている。橘（1971）によれば、この ‘Clubfor Research of Aging’ とは臨床医学、生物学、心理学の分野における専門家が一堂に会して老年期に関する研究のみならず、広く“aging”の過程について科学的考察を行う団体であった。さらにこの基盤のうえにアメリカに老年学会（Gerontological society）が1944年に結成され、この時に老年学（Gerontology）という概念がはじめて提唱された。この老年学の誕生について橘（1971）は、「gerontology の近代的生誕は、この aging という概念の発見にありと断言してはばからない」と主張している。そして1945年に米国老年学会（Gerontological society of America: GSA）が設立された。また米国心理学会（American Psychorogical Association: APA）では、1945年に第20部会として「成熟と老年部門」（Divisionon Maturity and Old Age、後に Division of Adult Development and Aging に改名）が設立された。日本における高齢者心理学は、高齢者を対象にした学際的学問として先に設立された老年学に牽引されるかたちで展開してきた。現在の高齢者心理学は、加齢変化を扱う発達心理学の立場と、学際的応用的研究分野である老年学の一部としての立場があると考えられる。

2-2. 高齢者心理学における加齢研究

2-2-1. 心理的加齢モデル

権藤（2008）は、心理的加齢に影響する要因として生物学的側面と社会的側面を設定して心理的加齢のモデルを紹介している。この両側面が心理的加齢に与える影響には直接的影響と間接的影響とがある。直接的影響には聴覚の低下（生物学的側面の加齢）が会話理解の低下といった認知的側面（心理的加齢）に与える影響や、外出頻度の減少（社会的側面の加齢）が精神

的健康を低下させる影響が挙げられる。一方、間接的影響には外出頻度の減少が脳の活動の低下（生物学的側面の加齢）を促進し、最終的に認知機能を低下（心理的加齢）させる影響が挙げられる。なお、このモデルには様々な加齢を媒介する要因として補償プロセスが想定されており、「こころの加齢」は体の加齢にともなった機能低下として考えるべきではないことを指摘している。

老年期は、生物学的側面と社会的側面でさまざまな機能の低下や喪失を経験する年代（植藤、2008）と考えることもできるが、喪失に対する補償プロセスを発達させることによって、加齢による機能低下への影響を減弱させることができると考えられる。

2-2-2. 知能の加齢変化

人間の知能については様々な研究が行われているが、知能の加齢変化についての代表的な理論が、Horn, J. L. と Cattell, R. B. が提唱した流動性知能（fluid intelligence）と結晶性知能（crystallized intelligence）における加齢パターンの相違である（Horn, J. L. & Cattell, R. B., 1967）。この理論は、知能がいくつかの一般因子で構成されたと考え、その中でも流動性知能と結晶性知能の2つは重要な一般因子であるという説である。中里（2007）によれば、流動性知能は新しいことの学習や新しい環境に適応するための問題解決能力であるが、脳の生理的な面との結びつきが強く、加齢や脳血管障害のような脳の器質的障害の影響を受けやすい特性がある。一方の結晶性知能は蓄積された経験を生かす能力のことで、学校教育や仕事などの様々な経験の蓄積によって涵養される能力であり、加齢や脳の器質的障害の影響を受けにくい特性がある。

また稲垣（2008）によると、多くの研究から加齢の影響は流動性知能では大きい結晶性知能では小さく、また、結晶性知能はかなり高齢になるまで維持されることが指摘されている。高齢者が様々な問題を解決するために必要とされるのはこの結晶性知能であり、豊かな経験により蓄積され熟成された知識や判断力、理解力の統合された形である「知恵」、柔軟で多様かつ独自の思考である「創造性」の能力である。これらの結晶性知能は、高齢期において発達し続ける、もしくは非常に高い能力を示すことが指摘されている。

2-3. 現代における高齢者と子どもの世代間関係

2-3-1. 核家族化の影響による世代関係の希薄化

かつて三世同居の家庭が一般的であった時代、祖父母と孫の関係は、家庭における教育と生活文化の伝承の観点からも重要な関係であった。宮本（1967）は民俗史の視点から、「年寄が家にいるということは、その家の伝承に大きい影響を与えた。今日われわれが故老から聞き

書きを取る場合、多くの旧習慣を知っている老人は、申しあわせたようにその祖父母が長生きをしているのである。つまり幼少時、老人から多くのことを教えこまれて成長したのである」と述べている。鎌田（1988）は、高齢者と子どもの密接な関係性について、「物語る機会を通して、老人たちはまず言葉で子どもたち（孫たち）に接触し、つぎにじっさいに自分の手と肌で子どもたちに接触する機会を持った。この二重の接触が子どもたちの生気やエネルギーや熱を老人たちに注入し、感染させるまたとない機会だったのである」と論じている。さらに、高齢者と子どもの関係が互いに引き寄せられるような関係として成立していることについて高橋（1987）は、「老人に特有の繰り返しの多い思い出話が、繰り返しのリズムの中で成長していく幼児にとって、何よりも貴重な『言葉による環境作り』をしてくれることを考えるだけでも、このことはよく理解できる」と、その重要性を指摘している。そして多田（2002）は、かつての高齢者と子どもの関係性を生活リズムの側面に注目して、「生活速度、生活リズムがほぼ同じである子どもとお年寄り、良きコミュニケーションのパートナーであった。しかも、余暇時間が豊富であり、そのほとんどを遊びの実現に費やす両者は、時間を共有する『遊び仲間』といった位置づけでもある」と論じている。

しかしながら現代においては、学校教育以外に塾や習いごとなど、子どもたちは個人的に忙しい時間を過ごしており、子どもたち自身にコミュニケーションをはかる時間がもてなくなっている。この点について多田（2002）は、「かつてのように、地域空間は、子どもたちが自由に遊び、仲間によってもまれ、鍛えられるといったような社会的資源としては機能しなくなっている」と、子どもたちを取り巻く社会環境が大きく変化したことにより、子どもの社会的位置づけが個別化してきたことを指摘している。

2-3-2. 高齢者と子どもの世代間交流の研究

高齢者と子どもの世代間交流にかかる先行研究として、次の研究を挙げる。

金森（2012）は、世代間交流の研究動向について、世代間交流研究の課題と現状を指摘している。第一に幼稚園・保育園で行う世代間交流研究の必要性、第二に高齢者の状況により交流内容が変化するため、高齢者の状況別に世代間交流を捉える必要性、第三に世代間交流を企画する保育者や介護者などの三世代の交流として捉える必要性の三点を明らかにしている。

また木林（2005）は、高齢者ケアにおける世代間交流の実践法について検討し、高齢者と子どもの交流を地域社会で発展させるために、コーディネーターを中心に、子ども、親世代、中高年、ボランティア、要支援高齢者、要介護高齢者のつながりをコーディネートする必要性を指摘している。

また渡辺（2004）は、世代間交流を行っている諸機関、団体組織の活動記録を分析し、世代

間交流の現状と問題点について概括し、高齢者と子どもの交流は保育園では事例も多く活発な交流が推し進められているが、少子高齢化社会の進行が著しい中、地域の実状に対応した工夫の必要性を指摘している。

さらに林谷・本庄（2012）の研究では、高齢者と子どもの日常交流に関する文献を分析し、日常交流のあり方とその課題について検討している。高齢者と子どもの交流活動には、交流プログラムの構築やサポート体制の確立、教員や看護職などの専門職との協働が求められることを報告している。

これらの研究は、教育、看護、福祉領域のものであるが、それぞれの学問の立場から高齢者主体の世代間交流について多角的に研究されている。高齢者ケアとしての側面から本林（2005）は「高齢者と子どもの関係性は双方向的なものであり、高齢者にとって子どもとの関わりは心身の活性化をもたらしうるものである」と述べ、子どもとの交流が高齢者のメンタルヘルスにも関係することを指摘している。しかしながら高齢者主体の世代間交流の研究は、質問紙による調査や記録に集約されたデータにもとづく研究が多く、高齢者と子ども交流の現場における具体的な問題点や実践における視点は明確にされていない。

日本における世代間交流は、産業構造の変化により核家族が増加した時期より行われるようになった。1970年代には、子どもたちとの交流で高齢者が生きがいを持ち、地域社会に貢献することと、子ども達も高齢者との交流で地域の文化に目覚め、地域の人々と豊かな関係性を持って成長して行くことを目指して、各地で行われてきた（渡辺、2004）。しかし日本では、少子高齢化、核家族化、地域共同体の崩壊などの社会生活の環境の変化から世代間の分離が進んだことにより世代間交流の重要性が増し、2004年以降、世代間交流の研究は活発に行われている（金森、2012）。

世代間交流は、高齢者の生きがい作りや若い世代の教育にも役立てられている。世代間交流の研究における高齢者の意識について日下（2008）は、「社会の中で生産的であることを重視する生き方を選択しなかったとしても、日常的な多世代とのかかわりによって相互の理解を深めたいという意識が持たれていることがわかる」と述べている。このように超高齢社会に直面している日本において、世代間が交流することは有意義であると考えられる。

現在では多彩な世代間交流の取り組みがある。特に高齢者と子どもの交流は教育の現場を中心に組み込まれている。その中でも保育園などの教育施設と介護施設を合併させた幼老複合施設（北村、2003）で展開される交流活動の事例数は多く、教育、福祉、建築などの領域で研究が進められ、プログラムも多様化している。さらに、交流による子どもと高齢者の相互ケアを目的とした幼老統合ケア（多湖、2009）の取り組みは、福祉や医療領域での研究が進められている。

3. 高齢者臨床における遊びを通した子どもとの交流の調査観察研究

3-1. 問題提起

日本における世代間交流の取り組みは、福祉施設、地域自治体、福祉関連事業などで主に展開されている。高齢者と子どもの世代間交流の取り組みは、高齢者福祉施設と保育施設を合わせた複合施設で数多くの活動事例がある。しかし複合施設での活動事例の多くは、子どもが人間関係の構築を学ぶための教育を目的とした事例であり、高齢者の心理面への注目度は低く、高齢者ケアにつながる研究事例は極めて少ない。

よって本研究では、子どもとの交流による高齢者の心理的影響を明らかにすることを研究の重点目標におき、調査の対象を高齢者介護施設の利用者とした。その理由は、介護施設で生活する高齢者を取り巻く環境は多世代との交流や子どもとふれあう機会に欠しく、特に施設に子どもが訪れるのは非日常的な光景であり、そこに映し出される高齢者の心理的变化を鮮明に観察できる環境が本研究に適していると考えからである。

3-2. 研究の目的

本研究では、特別養護老人ホーム（以下、特養Aとする）での入居高齢者と子どもの交流活動において、実践現場で生じた具体的な事象による入居高齢者への影響について調査観察を行い、その結果を分析し、遊びを通した子どもとの交流が及ぼす入居高齢者の心理への影響を明らかにすることを目的とする。

特養Aにおける取り組みは、『おもちゃライブラリー』という活動である。この活動は特養Aの所在する地域の子育て支援を目途とし企画された活動であるが、高齢者介護施設で実施する特徴から、子どもたちの育成を応援することが入居高齢者のこころのケアにつながり、新たな地域コミュニティづくりとなることが期待される活動である。

『おもちゃライブラリー』とは、『おもちゃ図書館』という名称で全国に展開しているボランティア活動のことである。障害をもつ子ども達におもちゃで楽しく遊んでもらいたいとの願いから始まった、『おもちゃ遊び』を提供する活動である。現在では障害の有無を問わず、子どもたちが一緒におもちゃで遊んで交流する場を提供しているが、この活動が高齢者介護施設で実践されるケースは全国でも極めて少ない。

なお本研究は、龍谷大学大学院文学研究科臨床心理学専攻の倫理審査委員会の承認を得ている。

3-3. 方法

3-3-1. 研究期間

X-1年5月よりX-1年11月まで<7カ月間>

3-3-2. 概要

研究対象のフィールドである特養AはO県P市に所在し、全室個室のユニット型の高齢者介護施設である。ユニットは11カ所、部屋数108室で、定員100名の施設である。研究時の入居者数は98名で、入居者は女性が83名、男性が15名であった。また、全入居者のうち83名が施設内で車椅子を使用している。

特養Aの『おもちゃライブラリー』は、所在するP市の社会福祉協議会の後援を受け、地域の支援ニーズに応えることを目標に開催されている。開催場所は施設内の「ホール」という名称の交流スペースであり、喫茶コーナーも併設されている。

3-3-3. 調査観察の対象

本研究では、特養Aの『おもちゃライブラリー』の実践現場を調査観察の対象とし、入居高齢者と子どもの間で交わされる言葉や動作による相互作用、交流による感情や表情などの情緒的な場面に焦点をあて、遊びを通した子どもと入居高齢者の交流に関するデータ収集を行った。

3-3-4. 調査観察の手続き

調査観察の手続きとして、ビデオカメラを使用して実践現場の様子を映像で記録し、併せてフィールドワークによる記録の収集を行った。

ビデオ撮影は交流活動の進行を把握するため、会場全体が映像に入る位置にカメラを固定して撮影を行った。

3-3-5. 調査観察における倫理的措置と配慮

ビデオ撮影については、特養Aの施設長に本研究の承認に併せて許可を得て行った。研究対象である『おもちゃライブラリー』の現場においては、開催ごとに参加者全員に本研究の目的と内容を説明した書面を配布し、さらに映像に入る対象者（入居高齢者、行事参加者）及びその保護者に対して、口頭と文書をもって次の4点を重点的に説明し、承認を得て同意のもとで撮影及び観察を行った。

- (1) 調査対象者の氏名等、個人を特定できる文書の情報は一切公表しない。
- (2) 調査観察において得られたデータや結果は、本研究の目的以外には一切用いない。

- (3) 録音及びビデオ撮影の記録物は、研究が終了した時点ですべて消去及び破棄する。
- (4) この研究の観察に参加及び協力をいただいた場合、研究対象者の意志によりいつでも中止することができる。また研究の参加協力をやめることによる不利益は一切ない。

3-4. 分析

3-4-1. 調査対象者の絞り込み

観察された事象を明らかにするため、記録されたすべての内容を分析の対象とした。分析の準備として、非言語の交流の様子や特徴的な行動などが収録されているビデオ映像の記録をすべて逐語記録にまとめ、さらにフィールドワークで観察記録したフィールドノートの内容を組み合わせ逐語データを編集した。さらに、編集した逐語データの内容を精査し、入居高齢者の中から調査対象者を4名に絞りこんだ。調査対象とした選出基準は次の三点である。第一点は、『おもちゃライブラリー』へ複数回来場された方（調査観察7回のうち5回以上来場された方）、第二点として、車椅子を自分で操作できる方、第三点として、自らの意志で来場された方とした（表1.）。

表1. 分析対象者の概要

	B氏	C氏	D氏	F氏
性別	女性	女性	女性	女性
年齢	80歳代中	90歳代中	90歳代前	80歳代前
介護度	3	2	3	4
移動手段	車椅子	車椅子	車椅子	車椅子
特徴	世話好きで行動派	控え目な性格独りであることが多い	社交的で話好き	表情変化が少なく寡黙
施設での日常生活	施設内をよく散策する	ユニットにすることが多い	ユニットにすることが多い	ユニットか自室で過ごす
会場への方途	車椅子を自走させて来る	車椅子を自走させて来る	車椅子を自走させて来る	車椅子を自走させて来る
子どもとの間隔	自分から近づく	近づいてくるのを待つ	自分から近づく	一定の距離をおいている
見る位置	接近して子どもを見る	近くで子どもを見る	少し離れて広く全体を見る	離れた位置から視線を変えずに見る
会場での行動	子どもと一緒に遊ぶ	子どもが遊ぶ様子を見る	一緒に遊ぼうとする	子どもが遊ぶ様子を見る
主な会話の相手	子ども	ボランティア	子どもの親、ボランティア	なし
主に声を掛ける相手	子ども	ボランティア	子どもの親	なし
家族の来訪	弟：月に一度	息子夫婦：月に一度	娘：月に一度	夫：週に1～2回

3-4-2. データの分析

調査対象者4名のデータ分析については、大谷（2008）が提唱している4ステップコーディングによる質的データ分析（Steps for Coding and Theorization, 以下、SCATという）の手法を用いた。

SCATは観察や面接で記録された言語データをセグメント化し、それぞれにデータの中の着目すべき語句、それを言いかえるためのデータ外の語句、それを説明するための語句、そこ

から浮き上がるテーマ、構成概念の順にコードを考案して付していく4ステップのコーディングと、そのテーマや構成概念を紡いでストーリーラインと理論を記述する手続きからなる分析手法である（大谷、2011）。

(1) セグメント化

各対象者の文字テキストデータである逐語データを意味のあるまとまりに並べ替えて分類し、概念的枠組みとなるテキストを作成し、それをセグメント化する作業を行った。これによりテキストデータより抽象度の高い概念のカテゴリーが抽出される。

(2) ステップコーディングの実施

対象者ごとにセグメント化したテキストを一旦文脈から切り離し、概念のカテゴリーを組み合わせ概念モデルを構築していく。

(3) ストーリーラインと理論記述

ステップコーディングで、浮き上がってきたテーマや構成概念を紡いで、抽出した情報をパーツとしてあつかいながらストーリーラインを組み立て、データの深層の意味を再文脈化し、このストーリーラインを断片化することで理論記述を行う。

3-5. 結果

3-5-1. ストーリーラインと理論記述

調査対象者のストーリーラインは次の通りである。なお、理論記述は表にまとめて示す。

(1) B氏のストーリーラインと理論記述

B氏は性格が穏やかで社交的な女性で、自分にできることは進んで実行する活動的で世話好きな人である。B氏は子どもと遊ぶことが好きで、子どもとの関係を大切にする人である。月に一度の『おもちゃライブラリー』では開始前から会場に来て、子どもたちが来場するのを待ち受けるなど積極的に行動し、闊達な姿勢で子どもたちを暖かく見守ってしてくれる。初対面の子どもであっても短時間で打ち解けて、すぐに一緒に遊ぶことができる適応力を持ち、さらに、車椅子に乗ったままでも子どもといっしょに遊ぶことができる柔軟な活動力がある。たくさん話ができるのは子どもが来てくれるおかげであると語るB氏は、会話も明晰で、遊んでいる子どもに積極的に話かけ、子どもの反応に同調して多彩なリアクションで応える豊かな表現力をもっている。日常の施設生活にはない貴重なひと時として『おもちゃライブラリー』を有意義に活用している。B氏が子どもと交流するときの特徴が三点ある。その第一点は、子どもと接するときの空間距離の使い方である。子どもたちといっしょに遊ぼうと自ら進んで声をかけることが多いが、その距離は近づきすぎず離れすぎず、適度な間隔で子どもと接している。また、子どもの行動を熟視するとき、子どもの表情に呼応するとき、笑顔になるときなど、状

況に応じて子どもとの距離間を変え、表情だけで会話をする非言語のコミュニケーションができる親近性をもっている。第二点は、子どもの年齢層を問わず応対できる点である。乳幼児でも小学生でも、多様な受容力で受け入れ、多彩な表現力と進取的な行動をもって応対している。第三点は、子どもの自由度を容認する接し方である。一緒に遊んでいる子どもが別の遊びをしはじめても、あるいは自分の前から立ち去って行っても、B氏は子どものそのままを受け

表2. B氏の理論記述

- | |
|--------------------------|
| ①自主的に活動し、積極的に行動する |
| ②子どもとの関係を大切にすること |
| ③子どもたちを見守る |
| ④子どもの動作や行動に同調して応える豊かな表現力 |
| ⑤子どもと交流するときの空間距離の使い方 |
| ⑦近づきすぎず離れすぎない距離 |
| ⑧子どもをも多様な受容力で受け入れる |
| ⑨子どもの表情に呼応する |
| ⑩表情だけで会話する親近性 |
| ⑪非言語のコミュニケーション |
| ⑫子どもの自由度を容認した接し方 |
| ⑬多彩な表現力と進取的な行動 |
| ⑭歓喜の空間における喜びの体現 |
| ⑮日常の施設生活ではできなかった心を躍らす経験 |

止めている。来るものを拒まず、去るものを追わず気宇壮大な姿勢で子どもたちと接している。

B氏にとって『おもちゃライブラリー』における参加者との交流は、喜びの体現ができる貴重な経験となっており、子どもたちと時間を共有することで、施設生活では封印していた心を躍らす経験ができていたことを喜んでいる(表2.)。

(2) C氏のストーリーラインと理論記述

C氏は、子どもたちが遊ぶ様子をできるだけ近くに寄って見ることが多い。『おもちゃライブラリー』の会場に来ると会場の状況をよく観察し、子どもの存在を身近に感じようと積極的に自分の操作で車椅子を移動させ、子どもたちのいるところへ近寄ろうとする。しかし、会場が混雑している場合は人を押しのけて前に出ることはしない。控え目な性格のC氏は、会場の混雑が収まるまで会場周辺を散策し、子どもたちに近づけるスペースが空くのを待つ。そして、子どもたちに近づける位置に落ち着くことができると、次に子どもたちの動きをじっくりと観察するように見つめる。交流のきっかけを模索し、子どもとの距離を細かく調整する。そして子どもと遊んでいる学生スタッフに近寄り、子どもが遊んでいるおもちゃのことや遊び方などを質問し、その学生スタッフを仲介役に子どもとの距離を調整する。直接には子どもに話しかけず、ワンクッション挟んだ交流をするのがC氏の特徴である。C氏は学生スタッフと子どもの仕草や表情について会話しながら、おもちゃで楽しく遊ぶ子どもの姿に目を細めて柔らかに微笑んでいる。子どもたちが楽しそうに遊ぶ光景を見ることが出来る空間はC氏の日常には無い。今、この空間に自分がいることを確認するかのようにC氏は学生スタッフに語りかけている。この語りに同調してくれる学生スタッフはC氏にとって重要な存在である。施設の職員によれば、日常生活でのC氏は独りでいることが多く、行事があっても参加は短時間で、他の入

居者と会話をすることも少ない。しかし、『おもちゃライブラリー』の時は、時間が経つのを忘れて遊ぶ子どもたちの様子を見ながら他の入居者との会話を楽しんでいる。このC氏の行動に施設職員は驚いている。遊んでいる子どもたちを見守ることで心を晴れやかにさせる効果がC氏の場合にはある。子どもたちはその場にいるだけでボランティアとしての役割を果たしている（表3.）。

表3. C氏の理論記述

- | |
|---------------------|
| ①子どもたちを身近に感じたい |
| ②子どもとの距離を調節する |
| ③ワンクッションおいた交流の方法 |
| ④ボランティアの存在 |
| ⑤日常の施設生活では見ることのない光景 |
| ⑥見守ることで心を晴れやかにさせる効果 |
| ⑦子どもたちは居るだけでボランティア |

(3) D氏のストーリーラインと理論記述

D氏は、話し好きで老若男女を問わず誰とでも明るく会話をする社交的な人である。自分のペースを維持しながら自由に行動するタイプで、『おもちゃライブラリー』では常に自然体で楽しんでいる。子どもが大好きで、子どもと同じところに居るだけで嬉しくなると語るD氏にとって『おもちゃライブラリー』は、子どもたちの息づかいを感じて子どもと一体になれる貴重な空間である。D氏は車椅子を自分で操作して会場に来て、子どもがおもちゃで遊んでいるエリアの外周を車椅子を少し進めては停める操作を繰り返しながら、ゆっくり子どもたちの様子を見て回る。活発に遊びまわる子どもたちの存在を感じて、施設での日常生活で枯渇した心のエネルギー補給をしている。会場にいと自然と笑顔が絶えない。

自然体の交流は多世代の交流をつくりだす。多世代交流が織りなす空間は、意図的に計画して与えられものではなく、人と人との交流が自然に発生する環境に他ならない。さらに多世代交流の現場では世代を貫く伝承が展開する。D氏は、交流の会場で出会った子育てに励む母親に、子どもの特性に関する知識と親としての自覚が子育てには欠かせない要素であることなどを語り伝える。時代を経て子どもの成長を見守ってきたD氏は良きアドバイザーになる。

表4. D氏の理論記述

D氏の自然体な行動には子どもも引き寄せられていく。D氏が独りでおもちゃを手に取り興味深く見ていると、近くで遊んでいた女兒が歩み寄り、D氏にそのおもちゃの遊び方をレクチャーしだした。そして2人で遊びながら会話が始まった。D氏の穏やかさに自分が受け入れられていることを認識した女兒は、次つぎと話を繰り返す。その女兒の話をD氏

- | |
|-------------------------|
| ①自然体で楽しむ |
| ②子どもと同じ空間に居るだけで嬉しくなる |
| ③子どもたちの息づかいを感じて一体になれる空間 |
| ④日常の施設生活で枯渇した心のエネルギーの補給 |
| ⑤子どもたちの存在を感じる |
| ⑥多世代交流 |
| ⑦意図的に計画して与えられたものではない |
| ⑧人と人との交流が自然に発生する環境 |
| ⑨世代を貫く伝承 |
| ⑩子ども自身が受け入れられていると感じる |
| ⑪子どもの話しに聞き入る |
| ⑫安心感と温かさに包まれた光景が自然に仕上がる |

は笑顔を絶やすことなく頷いて聞き入っている。安心感と温かさに包まれた光景が自然とできあがっていた。この時のことをD氏は、離れて暮らす孫を思い出させてくれた幸せな時間だったと振り返る（表4.）。

(4) F氏のストーリーラインと理論記述

日常のほとんどの時間を自室かユニットで過ごすF氏だが、『おもちゃライブラリー』の雰囲気がとても気に入っていて、開催されている時間のほとんどを会場で過ごす。早くから会場に来て、お気に入りのポジションに車椅子を停止させ、遊ぶ子どもに視線を注いでいる。施設の日常では聞くことのない子どもの泣き声や笑い声は、子どもが好きな入居者には心地よい響きである。Fさんは子どもの声が聞こえた方向に視線を送り、目を大きく開き、頬を緩め穏やかな表情で子どもを見つめる。F氏は子どもといっしょに遊ぶのではなく、子どもたちが遊ぶ様子を見守るタイプである。時には同じポジションで長時間にわたって遊ぶ子どもたちを見守ることもある。

F氏は会場へは車椅子を自分で操作し来場する。サポートは必要としない。F氏の自分が見やすいとするポジションは、子どもたち

ちと常に一定の間隔をあけた位置に設定される。調整はF氏自身の操作で車椅子を移動させて行う。子どもたちとの間隔は、近すぎず遠すぎず、足さない引かない自分の距離を維持している。さらにF氏は遊ぶ子どもの一挙手一投足に視線を向け続けて、時折、人前ではあまり見せることのない笑顔を見せる。そして子どもの行動や遊びを楽し

む様子に共鳴し、肩を揺らして反応している。見守ることで子どもと一体になって遊びに参加している。子どもの声や活気、素直な反応、小さな子どもへの愛しさは高齢者にとって情動面における刺激となり、反応を引き出してくれる。F氏にとって『おもちゃライブラリー』は、生活の場に居ながら、非日常的な経験ができる時間であり、変化の少ない日常の施設生活から解放された場所になっている（表5.）。

表5. F氏の理論記述

- | |
|--|
| ①子どもが遊ぶ様子を長時間にわたり同じポジションで見守る
②子どもと常に一定の間隔をあけた位置
③子どもとの間隔は、近すぎず遠すぎない距離を維持する（足さない引かない自分の距離）
④子どもの一挙手一投足に視線を変えない
⑤子どもが遊びを楽しむ様子に共鳴する
⑥見守ることで子どもと一体になる
⑦子どもの遊ぶ様子に引きつけられて視線を向け続け
⑧見守ることで、子どもの遊びに参加している
⑨生活の場に居ながら、非日常的な経験ができる時間
⑩変化の少ない日常の施設生活から解放された場所 |
|--|

3-5-2. SCAT 分析より抽出された理論記述のカテゴリーの構築

調査対象者4名のストーリーラインについてSCATによる分析を行った。分析から抽出され

た理論記述より30のサブカテゴリーを抽出した。次に抽出したサブカテゴリーより10のカテゴリーを抽出した。さらに、抽出したカテゴリーから4つのコアカテゴリーを生成した(表6.)。

表6. SCAT 分析より抽出された理論記述のカテゴリーの構築

コアカテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー
子どもとの交流における 入居高齢者の適応	積極的に子どもと交流する 入居高齢者の特徴	自主的に活動できる 自然体で楽しむ 多彩な表現力と進取的な行動力
	子どもとの交流に対する 入居高齢者の意識	見守ることで子どもと一体になれる 子どもの存在を感じ同じ空間に居るだけで嬉しくなる
子どもと交流する 入居高齢者のスタイル	子どもとの交流のメソッド	子どもの動きに同調して、喜びを豊かに表現する 子どもと交流するときの空間距離の使い方 表情だけで会話ができる親近性 ワンクッション(スタッフの協力)ある交流
	子どもの見守り	自分のポジションを変えずに子どもが遊ぶ様子を見守る見守ることで、子どもの遊びに参加している
	子どもとの距離	子どもとの間隔は、近すぎず遠すぎない距離 子どもと一定の間隔をあげた距離を維持する (足さない引かない自分の距離)
	子どもに対する姿勢、反応	子どもの表情に呼応する 子どもの自由度を多様な受容力で受け入れる 子どもの一挙手一投足に視線を変えない 子どもが遊びを楽しむ様子に共鳴する
子どもと入居高齢者の 交流から生まれた意識	子どもと入居高齢者の交流 に必要なサポート	子どもと高齢者の関係を仲介するスタッフの役割
	子どもと入居高齢者の交流 における新たな見解	子どもたちは居てくれるだけでボランティアになる 企画された出会いではなく、自然なふれあい
子どもとの交流がもたらす 入居高齢者への影響	入居高齢者の意識を変えた 交流の環境	日常の施設生活では見ることのない光景 子どもたちの息づかいを感じて一体になれる空間 生活の場に居ながら経験できる非日常的な空間 人と人との交流が自然に発生する環境 自然に始まっていた世代を貫く伝承(多世代交流)
	交流がもたらす入居高齢者の 心理的効果	子どもを見守ることで心を晴れやかにさせる効果 歓喜の空間における喜びの体現 日常にはできない心を躍らす経験 日常の施設生活で枯渇した心のエネルギーの補給 変化の少ない施設の日常生活から解放された場所

3-6. 考察

本研究では特養Aの『おもちゃライブラリー』について調査観察を行い、その分析結果について、①「子どもとの交流における入居高齢者の適応」、②「子どもと交流する入居高齢者のスタイル」、③「子どもと入居高齢者の交流から生まれた意識」、④「子どもとの交流がもたらす入居高齢者への影響」に分類した。次に、分類した4項目における、遊びを通した子どもとの交流がもたらす入居高齢者の心理への影響について考察する。

3-6-1. 子どもとの交流における入居高齢者の適応

特別養護老人ホームにおいて、子どもの存在を感じることでできる機会は極めて少ない。入居高齢者の日常の施設生活には、おもちゃで遊ぶ子どもの姿を見ることも、子どもの笑い声や泣き声は聞くこともない。『おもちゃライブラリー』はそんな施設の空気を活性化させてくれる月に一度の非日常の時間である。

特養Aの『おもちゃライブラリー』には、子どもたちだけでなく、子どもの親や遊びのサポートをするスタッフなど、外部から多くの人が集まる。その賑やかさに誘われ、子どもたちと一緒に過ごす時間を楽しもうと続々と入居高齢者が会場に集まる。日常はユニットや自室にすることが多い入居高齢者も、子どもたちの存在が感じることでこの機会だけは進取的に適応し、時間を忘れて自然体で楽しんでいる。日常の施設生活にはなかった心を躍らす経験を生活の場に居ながらにしてできる貴重な時間としていることが考えられる。

3-6-2. 子どもと交流する入居高齢者のスタイル

『おもちゃライブラリー』に来場した入居高齢者の子どもとの接し方には、積極的に子どもと接して交流するスタイルと、子どもたちを見守るスタイルに大別できる。

積極的に子どもと接して交流するスタイルの人は、進取的に行動し、子どもの動作や行動に同調して応える表現力も多彩で豊かである。さらに、子どもの自由度を容認した接し方で、一緒におもちゃで遊べる適応力をもっている。子どもたちとの間隔は、近すぎず遠すぎない距離を維持しながら、子どもの話しに聞き入り、子どもと一緒に遊びの楽しさに同調するなどの特徴があった。

一方、子どもたちを見守るスタイルの人は、子どもたちとの間に一定の距離をおいており、空間を感じとり、その距離を自分で調節して維持している。また、このスタイルの人には、離れたところから見守るタイプと近くで見守る人タイプの2つのタイプがある。前者は、同じ場所にとどまり視線を変えずに子どもの一挙手一投足を見守り、表情で語りかけるような親近性がある。後者は、子どもと直接に交流するのは苦手だが、子どもたちを身近に感じたいとするタイプで、スタッフを仲介役としてワンクッション挟んだ交流方法で、子どもの表情に呼応し、遊びを楽しむ様子に共鳴する非言語のコミュニケーションができることが考えられる。

3-6-3. 子どもと入居高齢者の交流から生まれた意識

これら来場した入居高齢者には共通する特性として、子どもとの関係を大切にしたい、次の3点の交流メソッドがあると考えられる。

(1) 子どもと近づきすぎず離れすぎない距離にいて、その距離は自分固有の距離である。

- (2) 子どもを多様な受容力で受け入れる。
- (3) 遊びに対して子どもと同じ目線で適応し反応する。

3-6-4. 子どもとの交流がもたらす入居高齢者への影響

自分に何かを語ろうとする相手に対し、期待を込め、もらさず真剣に向き合おうとするコミュニケーションの要素が、すでに子どもには具わっていると考えられる。その意味で、交流現場での子どもたちはその場に居ただけで入居高齢者を励ますボランティアになっていると考えられる。したがって、子どもたち自身が受け入れられていると感じる空間づくりと対応は重要である。

入居高齢者が子どもたちの息づかいを感じて一体になれる空間は、日常の施設生活から解放された場所であり、枯渇した心のエネルギーの補給の場になっている。そこには、施設に入居する以前に経験していた日常生活に当たり前にあった光景を取り戻したいとする意識が生まれていると考えられる。

来場する入居高齢者のだれもが、「子どもたちと同じ空間に居ただけで嬉しくなる」と、和やかな表情で語る。子どもを見守ることに心をはなれやかにさせる効果が具わっているものと考えられる。さらに、特養Aの『おもちゃライブラリー』では子どもたちと共に様々な世代が交流しており、遊ぶ子どもを前に親と入居高齢者が交流する場面も多い。意図的に計画して与えられたものではなく、自然に交流が発生する環境に仕上がっており、入居高齢者は日常の施設生活では経験できない喜びが体现できている。

この空間で自然に始まっていた多世代交流は心的効果となり、交流する入居高齢者は人生における歩みの先導者に仕上げられている。

4. 総合考察

本論において、先行研究の概観では高齢者心理学の流れについて、そして、高齢者世代と子ども世代の関係性を基軸とした世代間交流の研究について概説した。これらをふまえ、特別養護老人施設において実践されている高齢者と子どもの交流に着目し、遊びを通した子どもとの交流プログラムが及ぼす入居高齢者の心理への影響について調査観察研究を行った。ここではこの研究の総合的な考察を行う。

4-1. 生涯発達心理学と「老い」について

従来の発達心理学では、成長が著しい乳幼児期や児童期および青年期を対象としていた。しかし、人の人生は生まれた時代や社会環境によって左右され、成長においても大きな影響を受

け、時代の進捗は人間の生き方を多様化させる要因となっている。その本質に迫るため近年においては生涯発達という概念が生まれ、心理学でも用いられるようになり、生涯発達心理学 (life span developmental psychology) へと引き継がれた。生涯発達心理学は人間の誕生から死に至るまでの人の生涯の過程を対象とし、人間の生涯の様々な時代に生じる変化や特徴について探究することが課題とされている。Baltes, P. B. (1987) は、成長と老化は表裏一体の現象であり、成長とは生物学的形態上の新たな獲得で、獲得あれば同時に喪失が生じる、これが老化であると述べている。この獲得と喪失は発生学的には出生時より始まっていると考えられ、獲得と喪失を繰り返しながら、統合的な主体として老いていくことを指し示している。この考え方を強調する生涯発達とは、人間の生物学的な成長と老化による精神面の変化を並行しているものと位置づけ、人生を統合的にとらえようとする概念であると考えられる。

4-2. 高齢者と子どもの世代関係と高齢者ケア

4-2-1. 高齢者と子どもに求められる世代関係の修復

戦後の経済成長による核家族化が進んだことによって三世同居の家庭が減少し、高齢者と子どもがそれぞれ別の生活環境に暮らす傾向にある。かつて祖父母と孫の関係は、家庭における教育と生活文化の伝承の観点からも重要視されていた。高齢者と子どもの関係が互いに引き寄せられるような関係として成立したのは、高齢者と子どもはお互いに繰り返すことを厭わない要素をそなえていたからであると推測される。高齢者と子どもの関係性は双方向的なものであり、高齢者にとって子どもとの関わりは心身の活性化をもたらしうものである (木林、2005)。さらに、高齢者の知恵や根気よさ、また子どもの屈託のなさが相互作用するところに教育的効果が期待できる (中田、2009)。

かつて日本には、居住地域で多世代が日常に交流し協力しあうコミュニティ構造が各地に存在していた。しかし戦後の経済成長以降、人口変動や核家族化の影響をうけ、世代間格差の発生は避けられない状況が続いている。さらに日本の急速な少子高齢化は、子ども世代と高齢者世代の人口変動が社会における生産力を引き下げる傾向にあるだけでなく、この両極の世代間関係の著しい希薄化により、教育や福祉、家族や生活領域における文化の継承、地域社会の安全対策など、社会全体に課題が波及しており、今後において深刻な問題に進展する可能性を孕んでいると考えられる。

しかしながら、現代における高齢者と子どもの世代間にある希薄化の傾向は、日本がめざす共生社会の形成にかかるターニングポイントとして捉えるべきであると考えられる。なぜならば、高齢者ケアと子どもたちの教育は求心的な関係にあり、地域社会の福祉においても重要な課題であると考えられるからである。人と人との関係性の集合体が社会となるのが共生社会の特徴

であり（奥村、2005）、地域社会にあっては、高齢者自身が安全で安心できる社会生活を実現させるための構成員になることで、意欲が増進され、活動することにより体力の維持にもつながる。さらに、自分の記憶や経験をもとに、子育て支援や、家族関係の相談、次世代の人材が見失いがちな「いのちの継承」に関する助言や教育的指導は、年齢と経験を積み重ねた人だからこそできる役割であり、その役割を担うためにも高齢者自身が生き生きと自分らしく生活できる社会のあり方が重要である。高齢者が置き去りにされないよう、子どもたちの成長が阻害されないよう、そして新たな格差社会を生まない環境整備が日本には求められていると考えられる。

4-2-2. 子どもの「遊び」と世代間交流

子どもにとって「遊び」は楽しいもので、「遊び」の経験は成長する過程においても心を育てる重要な意味を持っている。子どもは「遊び」から規範やコミュニケーションを学ぶ。子どもは身体を使うことから「遊び」を始め、ものに触れて感じたり、声を出したり、あらゆる行動をとり、これらの行動からルールを学ぶ。幼児になると少しずつ遊び方を学び、さらに他の子どもたちと遊ぶことを通して、人と交流することの基礎がつくられる。「遊び」は子どもが発達するための原動力になりうると考えられる。この点を Winnicott, D. W. (1971) は、「遊ぶことは成長を促進し、健康を増進する。また、遊ぶことは集団関係を導く。また、遊ぶことは、精神療法のコミュニケーションの一形態になりうる」と述べている。しかし、子どもは潜在的にそなわった能力だけで成長ははかれないと考えられる。養育者からの安定した愛情により、その能力が引き出されるのであり、信頼関係の中で成長するものと考えられる。

今回の調査研究において、世代間交流の現場では「遊び」を通して高齢者と子どもが交流することは、いっしょに遊ぶ中で、高齢者が教え、子どもは学ぶという関係が生まれ、人格形成に向かうという積極性が確認された。子どもたちにとって高齢者とのつながりは、社会に対応するための教育となり、高齢者にとっても健康増進、メンタルヘルスに資する効果が期待できるものと考えられる。さらにこのような交流プログラムやサポート体制を高齢者ケアのなかに取り込み、他世代や地域に対して開かれたものとして実践していくことは、高齢者の身体や行動面だけでなく、精神面における介護、さらには介護予防など、効果的に高齢者ケアの幅を拡げることにつながるものと考えられる。したがって、高齢者のこころのケアの視座から世代間交流のあり方は追求されるべきであり、そこに臨床心理学が担うべき一つの役割があると考えられる。

引用文献

- Baltes, P. B. (1987) Theoretical propositions of life-span developmental psychology: On the dynamics between growth and decline. *Developmental Psychology*, 23-5. pp. 611-626

- Birren, J. E. (1959) Handbook of Aging and Individual: Psychological and biological aspect. Chicago: University of Chicago press.
- Birren, J. E. & Schaie, K. W. (2006) HAND BOOK OF THE PSYCHOLOGY AGING Sixth Edition. Elsevier Ins., 藤田綾子・山本浩市 監訳 (2008) エイジング心理学ハンドブック、北大路書房
- Cicero, M. T. (B.C. 44) CATO MAIOR DE SENECTUTE, 中務哲郎訳 (2004) 老年について、岩波文庫、pp. 16-17
- Erikson, E. H. (1959) Identity and the Life Cycle., New York, International Universities Press., 西平直・中島由恵訳 (2011) アイデンティティとライフサイクル、誠信書房
- Erikson, E. H., Erikson, J. M. & Kivnick, H. Q. (1986) VITAL INVOLVEMENT IN OLD AGE. W. W. Norton & Company, N. Y., 朝長正徳・朝長梨枝子訳 (1990) 老年期いきいきとしたかわりあい、みすず書房
- 権藤恭之 (2008) 生物的加齢と心理学的加齢、権藤恭之 (編) 高齢者心理学、朝倉書店、pp. 23-43
- Havighurst, R. J. (1972) Developmental tasks and education, Third edition. David McKay Company., 児島憲典・飯塚裕子訳 (1997) ハヴィガーストの発達課題と教育—生涯発達と人間形成—、川島書店
- 林谷啓美・本庄美香 (2012) 高齢者と子どもの日常交流に関する現状とあり方、園田学園女子大学論文集、46、pp. 69-87
- Horn, J. L. & Cattell, R. B. (1967) Age differences in fluid and crystallized intelligence. Acta Psychologica, 26. pp. 107-129
- 稲垣宏樹 (2008) 知能、権藤恭之 (編) 高齢者心理学、朝倉書店、pp. 95-104
- Jung, C. G. (1969) THE STAGES OF LIFE, Collected Works of C. G. Jung, Volume 8: Structure & Dynamics of the Psyche. Princeton University Press. pp. 387-403
- 鎌田東二 (1988) 翁童論—子どもと老人の精神誌、新曜社
- 金森由華 (2012) 高齢者と子どもの世代間交流—交流内容を中心に—、愛知淑徳大学論集福祉貢献学部篇、2、pp. 69-77
- 木林身江子 (2005) 高齢者ケアにおける世代間交流の現状、静岡県立大学短期大学部 研究紀要、19-W、pp. 1-13
- 北村安樹子 (2003) 幼老複合施設における異世代交流の取り組み—福祉社会における幼老共生ケアの可能性—、ライフデザインレポート、153、第一生命経済研究所、pp. 4-15
- 日下菜穂子 (2008) 超高齢時代における世代間交流の意義—関西学研都市高齢者の世代間交流に関する調査から—、同志社女子大学学術研究年報、59、pp. 69-78
- 草野篤子 (2004) インタージェネレーションの必要性、インタージェネレーション コミュニティ—を育てる世代間交流、現代のエスプリ、444、pp. 5-6
- 宮本常一 (1967) 庶民の発見、講談社学術文庫、講談社、p. 209
- 中田尚美 (2009) 老人と子どもの民俗学に関する一考察—高齢者と子どもの境界性を中心に—、神戸海星女子学院大学研究紀要、48、pp. 63-80
- 中里克治 (2007) 知能、知恵の発達、下仲順子 (編)、高齢期の心理と臨床心理学、培風館、pp. 64-77
- 大谷尚 (2008) 4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案—着しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き—、名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学)、54-2、pp. 27-44

- 大谷尚 (2011) SCAT: Steps for Coding and Theorization —明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析法—、日本感性工学会論誌、10-3、pp. 155-160
- 奥村隆一 (2005) 高齢社会における「共生の想」～団塊高齢者の地域共生～ 第一部2015年の高齢社会、三菱総合研究所所報、45、pp. 60-73
- 佐藤真一 (2008) 高齢者と加齢をめぐる心理学的考察の歴史と展望、権藤恭之 (編) 高齢者心理学、朝倉書店、pp. 1-22
- 佐藤真一 (2010) 老いの生活への適応過程、佐藤真一、大川一郎、谷口幸一 (編著) 老いところのケア—老年行動科学入門—、ミネルヴァ書房、pp. 115-135
- 佐藤真一 (2014) 老いところと高齢社会、老いところ、佐藤真一、高山緑、増本康平 (著)、有斐閣、pp. 3-20
- 進藤貴子 (2010) 高齢者福祉と高齢者心理学、川崎医療福祉学会誌 増刊号 pp. 29-44
- 橘覚勝 (1971) 老年学 その問題と考察、誠信書房
- 多田千尋 (2002) 遊びが育てる世代間交流、黎明書房、p. 14
- 高橋巖 (1987) シュタイナー教育の方法 子どもに則した教育、角川書店
- 多胡光宗 (2009) 幼老統合ケアの理論と実践—「高齢者福祉」と「子育て」をつなぐケアの実践と相乗効果—、生活科学研究誌、8、pp. 1-14
- 谷口幸一 (2007) エイジング心理学とジェロントロジー、谷口幸一・佐藤真一 (編著)、エイジング心理学—老いについての理解と支援—、北大路書房、pp. 5-10
- 渡辺裕子 (2004) 幼児と高齢者の世代間交流の現状と問題点、新潟青陵大学短期大学部研究報告、34、pp. 15-24
- Winnicott, D. W. (1971) Playing and realing . Tavistock Publications Ltd, London.、橋本雅雄 訳 (1979) 遊ぶことと現実、現代精神分析双書第II期、4、岩崎学術出版社、p. 58